



写真1 紅花の取引を示す須田家文書

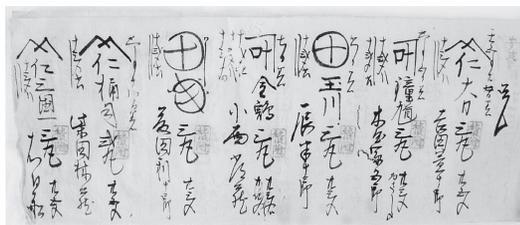


写真2 紅花が京都へ出荷されたことが分かる資料



※ ■ は当時の地名に当たる場所です。

紅花は、古くから紅染の原料として利用されてきたが、商品作物として各地で生産され、広く出回るようになるのは江戸時代に入ってからである。当時紅花の第一の産地で、全国生産量の大半を占めたのが最上地方(山形県)である。最上の生産量は寛政期(18世紀末)を境に急速に上昇したといわれるが、それと同じ頃に、江戸の商人「柳屋」の奉公人が上尾の百姓七五郎に、最上産の紅花の種を与えて栽培させたのが、上尾周辺での紅花生産の始まりといわれる。

柳屋は江戸小間物問屋のうち紅おしろいを取り扱う商人であり、江戸商人主導が始まったのが武州の特徴である。当初は作りなれず生産量も少なかったようであるが、次第に桶川、上尾、大宮、浦和宿最寄りの村々で盛んに作られるようになった。幕末には入間・高麗地方(西山紅花)にまで広がり、最上に次ぐ生産量を占めるまでに至った。

享和元(1801)年には、南村の須田治兵衛が京都の紅花問屋「吉野屋」「伊勢屋」「大黒屋」宛ての紅花送付を、桐生の飛脚問屋「近江屋」に依頼しているなど、早くから江戸の問屋を通じて直接京都の紅花問屋との取引が行われていることが分かる。

紅花は咲いた花弁を摘み取り、紅餅に加工してから取引される。この紅餅にする作業までが栽培農家の仕事であり、これを集荷し紙袋に入れて荷をこしらえるのが、当時「花買」と呼ばれた仲買商人である。安政年間に現在のの上尾地域でこの仕事を行っていたのは、須田治兵衛(南)・須田大八郎(久保)・武蔵屋治左衛門(上尾宿)などである(写真1)。

最上の紅花が春まきで旧暦6月頃に生産されるのに対し、武州では前年秋にまかれ、5月頃に摘み取られるため、最上産より1カ月早く「早場」ものとして出荷され高値で取引された(写真2)。上尾宿の武蔵屋治左衛門も、買付資金を京都の紅花問屋最上屋から得るなどして成長していった。

安政二(1855)年に江戸の商人との訴訟事件も起きるが、武蔵屋治左衛門や須田大八郎などは近辺の紅花商売について①5月中旬の農繁期に老人・子どもなどの手業で摘み取り、年貢の足しにしている②農業の合間に仲買を行っている③絹縮緬の緋色紅染など染物用の栽培で、京都の紅花商人が買い付けに来ると説明し、江戸の問屋の支配下に入ることを拒んだ(最後は、手数料を支払うことで和解)。(上尾市文化財保護審議会委員 岸 清俊)

### コラム column

## 上尾宿の紅花仲買商「武蔵屋」

安政2(1855)年の江戸商人との訴訟事件で、訴訟人代表の一人となった武蔵屋治左衛門は、上尾宿内で唯一知られる紅花仲買商人である(写真1)。武蔵屋は、代々治(次)左衛門を襲名し、上尾宿で商業を営んできたといわれるが、いつ頃から紅花を取り扱い始めたのかは明確でない。

紅花取引に関する史料は、嘉永年間から現れる。嘉永4(1851)年、武蔵屋治左衛門は、紅花3銘柄174袋についての仕切書を最上屋宛に発送している。内金200両を為替金で請け

取り、不足分の36両余も為替で送るよう依頼する内容である。以後毎年のように紅花を出荷し、慶応3(1867)年には宝紅・力競・天下一など5銘柄の仕切目録を出している。

明治10(1877)年の第1回、同28年の第4回内国勸業博覧会に、林次(治)左衛門(武蔵屋)は紅花を出品するが、開港以降の中国・インド産紅花や安価な化学染料の輸入によって、幕末期には最上に次ぐ生産量を誇った武州紅花が衰退すると、武蔵屋は呉服太物商へと転身する。

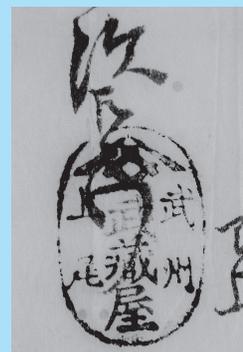


写真1 文書に押された武蔵屋の印